Hosei University Repository

# 井上筑後守政重の海外知識について

長谷川一夫

## 一はじめに

井上筑後守政重に関する従来の研究は、寛永十七年の平戸和蘭商館破壊と翌十八年の長崎移転の連絡ある事件に関する活動[1]、同十七年宗門奉行に任ぜられて以後の切支丹迫害に関する活動[2]に重点が置かれており生涯に亘った研究はほとんどみられない[3]。

そこで、まず、政重の略歴について述べてみたい。

井上清兵衛政重は、天正十三年、井上半右衛門清秀の四男に生まれ、最初横須賀城主大須賀康高に仕えている[4]。これについては父清秀、系譜上[5]の祖父清宗も大須賀氏に仕えていることから[6]、政重の仕官は彼等の推挙によるものと思われる。その後、何時の頃か政重は蒲生家に倚頼している[7]。しかし、両家に仕えていた頃の政重については未詳である。

慶長十三年、政重二十三才の時、稟米二百俵の書院番士として御家人の列に加わった[8]。それは、彼の母が秀忠幼児の乳母[9]であることや、実兄井上主計頭正就は幼少時より秀忠と共に城中で育ち、以後も秀忠側近の年寄衆の一人として永井尚政、板倉重宗等と「近侍の三臣」[10]と称され、秀忠の寵臣であることなどが、有力な背景になっていたとも思われる。更に、後の老中松平信綱の妻は政重の姪[11]、政重の妻は後の若年寄太田資宗の姉[12]であることなども以後の政重の抬頭を有利に展開した要因と思われる。

元和二年政重は竹千代、即ち後の将軍家光の下に配属された[13]。同四年五百石取りの旗本となり[14]、同九年家光の将軍宣下の上洛に供奉し[15]、家光の将軍職世襲に伴い、書院番士は自らの精勤振りを認知されようと非番だけでなく、一日に早朝、日中、薄暮、夜中と四度も出仕するため、その勤務状態を記録する役に補されている[16]。そして、同年中千石に加増されたのは[17]、この功績を認められたのであろう。又、寛永二年目付役に補された[18]のもその監察の才幹を認められたことによるのであろう。同四年叙爵して従五位下、筑後守となる[19]。その後同九年政重は外の九人と共に家光近侍長年の者として五の字の指物を許されている[20]。政重が家光付になって以来家光の信頼を得て側近として重きをなし抬頭してきていることが窺われる。同年十二月二千石加増され四千石となる[21]。そして、翌々十二月政重は水野守信、柳生宗矩、秋山正重等と共に

Hosei University Repository



幕政機構整備の一環として設置された大目付[22]に補されその職務規定七ヵ条の任務[23]に携わることになった。

島原乱起るや幕府はその鎮圧に苦悶し、翌十五年一月上使松平信綱を派遣したが、政重は信綱やそれ以前に既着していた戸田氏鉄の助手として有馬に赴き[24]、原城攻撃を作戦面で援助していることは「島原日記」[25]に詳かである。この頃から政重は切支丹禁圧に関係していたらしく、この年末の仙台[26]及び翌十六年初め最上で捕縛された切支丹信徒の穿鑿に携わり[27]、これらの功績を認められたことによると思われるが、同年六月六千石加封され、上総国高岡一万石を領有する譜代大名に取立られる[28]と共に、宗門奉行を兼務することになった[29]。同二十年切支丹禁圧の功を認められ三千石を加増されている[30]。その二ヵ月後、筑前で捕縛された潜入宣教師を穿鑿し、転宗させた後、切支丹屋敷に置き給与を与えて後の穿鑿の助手とし得たことなど、切支丹禁圧に多大な貢献をなしたことは、「契利斯督記」[31]に詳かである。

一方、それと並行しての長崎出張も見逃せない。寛永十六年の紅毛子女の国外追放[32]、同十七年の平戸和蘭商館の破壊[33]と翌十八年の長崎移転に伴う諸事務[34]、正保四年葡使節渡来の際は幕命通達と長崎警備役の指揮監督[35]、更に、慶安元年には葡使節渡来に関する蘭側の援助問題の事実糺明のための新旧両商館長の訊問[36]などその数は五回[37]を数え、幕府対外政策の参画者、長崎官憲としての性格[38]を示す活動もなしているように思われる。

以上のような足跡を残した政重は万治二年閏十二月老衰により



職を解かれた。政重七十三才の時である。翌三年入道して幽山と号し、所領は嫡孫政清に譲り、その内千石は二孫政則に、五百石は三孫政明に分与した。そして、寛文元年二月二十七日満七十六才の生涯を閉じたのである[39]。

以上述べたことは周知の事実であるが、政重の生涯の大半は幕府内にあって、その職歴が示す如く全て監察職に携わっている。それは政重の周囲の事情にもよるであろうが、家光の信頼と彼の才幹が遺憾なく発揮された所以であろう。

そこで、本論では、政重の才幹の一端を示すと思われる。彼の海外知識は如何なる程度の認識を有し、それが幕府の対外政策と如何に関連していたかについて述べてみたい。その前に、それが如何なる方法で摂取されたか、そして、政重の摂取活動と知識の内容、それに、彼の家臣や長崎奉行等との連絡から推察される幕府の対外政策に枢要な位置を占めていたと思われる処から幕府海外情報機関を想定して論究してみたい。

## 二　海外知識の摂取方法

先学諸氏の研究によれば、幕府が継続的に海外知識を摂取するに有した主な方法は、欧州人の中では当時通商を許された唯一の蘭人からの和蘭風説書、更に、江戸参府を機会に幕府の有司が彼等から直接聴取する方法、長崎入港の唐商船の提出する唐風説書による方法の三通りであったと言われている[40]。

そこで、政重の有したその方法を考えてみると、寛永十八年四月二日蘭人拝礼の席上、列座した老中、政重、長崎奉行等は、長

Hosei University Repository

崎移転と、切支丹の外洋上の動勢を察知し、万一に備えるため通報を怠って、後日発覚した場合は通商を断絶するという威嚇の下に風説の報告を要求している。[41]即ち、政重は和蘭風説書提出を要求した一人である。更に、幕府は慶安二年八月二十九日、「東シナ海上でゴアに向う南蛮船に遭遇した」という和蘭風説書の到着により、同船による切支丹の日本潜入を恐れ、松平信綱と政重は西国諸地域の諸侯の家臣を召集し、沿岸警備の厳重なることを命じている。[42]従って、政重は宗門奉行の職務上、和蘭風説書から切支丹の動勢を中心に海外情報を摂取していたと思われる。更に、それと同じ目的を持つ唐風説書からも同様に知識を摂取したものと思われる。

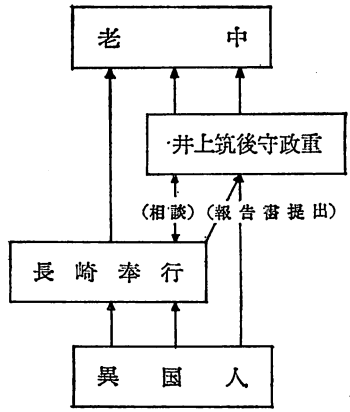
次に、一六五一年一月六日政重は在府中の蘭人医師と会い、自らの通詞を介して蘭人医師の前任地とその周辺での葡語通用の有無等について尋ねている。[43]更に、翌年一月三十日この通詞は政重と馬場利重のために本年持参した薬品のことを聞くために蘭人を訪ねている。[44]この通詞について村上直次郎氏は、鎖国後の切支丹関係その他で、異国人取調べのための政重の葡語通詞であろうとし、又、一六五八年の蘭文書にも「筑後殿の通訳ギンエモン」の名があることから同一人と推測されている。[45]又「阿蘭陀通詞由緒書」志筑孫兵衛の条によれば、ブレスケンス号事件の訊問を果した功績を賞讃された孫兵衛は、褒賞並びに江戸須田町に屋敷を授与され、江戸詰通詞を命ぜられた。しかし、その後、孫兵衛は政重に「若江戸通詞御用無御座候者、長崎通詞役被仰付被下候者、妻子平戸より引越申度」旨嘆願した処、これを許され長崎奉行宛の書状を認めてもらい長崎詰通詞に再赴任した。[46]以上のことから、政重は葡語通詞を側近に置くだけでなく、和蘭通詞支配にも関係していたと思われる。葡語と蘭語上の相違により、言葉の疎通は可なり困難であったとしても、蘭語通詞を側近に置いたことや、和蘭通詞支配に関係していたと思われることは、政重の海外知識摂取を容易にしていた一因であろう。

ところで、オスカー・ナホッド氏の説によれば、一切の異国人事務は絶対に長崎奉行を通じて幕府に上奏される手筈になっていたとあるが、[47]一六四三年三月三十一日の商館長オーフェルトフーテルの商船碇泊期間の延長、生糸のパンカド決定前に他商品を販売する許可に関する長崎奉行への請願に対し、長崎奉行はそれを妥当と考え、「大目付井上筑後守政重（老中）殿と相談の上、顧問官たちに提案しよう。」という返答がなされている。[48]又、一六四六年二月十六日商館長ツムから政重への銅輸出許可、出島居住者の自由緩和と主要館員の長崎在住商人との交際、商談の許可、生糸以外の商品のパンカド決定前の販売許可に関する請願には、「長崎奉行馬場三郎左衛門利重（三郎左衛門殿）から、まだ執務上の報告書が出されぬので、それが出た上で考慮しよう。」と返答している。[49]更に、明の都督鄭芝竜が平戸に残して置いた妻子の送還を依頼した時は、「長崎奉行より井上筑後守を以て言上しければ、御許容ありて、妻子福州へ遣さる。」という『華夷変態』の記事もある。[50]以上のことを要約すると、蘭人の上奏は長崎奉行に対してだけでなく、直接政重にもなされている。それは政重と長崎奉行の相談の上で上奏が決定される場合、長崎奉行の報告に基づく政重の審査の結果による場合、ナホッド氏の

Hosei University Repository








註　(1)　オスカー・ナホッド氏の指摘による場合

(2)　長崎奉行と井上政重の相談による場合（鄭芝竜の上奏についても一応相談があったものと考える）

(3)　井上政重に直接なされる場合

指摘による場合など、左図の如き上奏経路が考えられる。これらのことから政重が上奏経路上極めて重要な位置にあったことが推知される。

さて、一六四二年一月十六日政重の使は、拝礼のため江戸に到着した商館長エルセラックに、「それまでに何か用があれば、何時でも彼の邸に来るように」[51]と、更に、一六五三年二月三日拝礼遅延により江戸逗留が長引いている商館長コイエットには、「閉じ篭ってばかりでは不快であろうから、他所は許されぬゆえ、彼（井上政重）の邸に来るように」[52]と伝えている。蘭人の在府中の外出について板沢武雄、斎藤阿具の両氏は、蘭人とその同行者は同所に泊し、拝礼前は外出禁止、同行吏員の帰宅さえ不許可であったと説明されている。[53]しかし、政重は宗門奉行として長崎奉行と共に拝礼に関する一切の事務を掌る[54]という監督的立場から、拝礼前であっても彼等の慰労のため、又彼自身の知識吸収のためしばしば自邸に招いていることは『商館日記』に散見する処である。以上のことから、井上邸は蘭人が比較的自由に訪問を許された唯一の個所であったことが窺われる。

更に、政重の対蘭人交渉の態度についてみると、正保四年の葡使節渡来に関する蘭側の援助問題について、商館長コイエットのため政重が尽力したことに関し、一六五〇年一月十三日商館長ブロラクホルストと通詞助左衛門の談話中に、政重は将軍の怒りに触れ「汝は蘭人の弁護をするか」と叱責され、七十日間の出仕停止処分を受けたとある。[55]このことから政重が親蘭的な人物であったことが窺われると共に、政重の情報が如何に緻密であっても、それには将軍の幕政の方針と相反しないという制約があったと思われる。

政重と蘭人との交渉は、洋酒や乳製品を好む西洋カブレの単なる西洋文化への興味、即ち物的好奇心や、海外知識からくる知的好奇心を媒介とした需要者と供給者の関係だけでなく、幕府対外政策の参画者と蘭人との通商貿易上の利害関係を根底になされていたものと思われる。とにかく、政重にとって蘭人との交渉は海外知識摂取の好機会であったことは言うまでもない。

次に、前項で述べた如く、五回に亘る長崎出張時の活動は、幕

Hosei University Repository

命通達は勿論、異国人関係の事務、長崎地内の情勢把握、海外情報の聴取等に重点が置かれており、当然、政重はその途上蘭人だけでなく、長崎奉行、通詞、長崎地役人等との交渉により海外知識の摂取があったことは想像に難くない。更に、一六四二年十一月九日長崎奉行支配下の通詞がその命で商館長オーフェルトワーテルに尋ねたのは、長崎奉行が台湾のキールン占領の報を政重に書送った時、彼からの返翰の内容であること[56]、翌年十月十六日同じく長崎奉行の命で通詞が商館長エルセラックと再度蘭国と戦争するに至った理由を尋ねた時、明日使者を江戸に遣わして政重に報告する旨付言していることから[57]、政重の処へは絶えず最新の海外情報が報告されていることが窺われる。又、政重の家老以下家臣等は江戸において蘭人の参府を機会に、彼等から海外情報をはじめ、天文、幾何、数学など様々な海外知識を摂取するだけでなく、家老岡島右馬丞（後に井上玄蕃）に至っては、政重の代行として長崎に赴き、切支丹関係の事務や海外情報の摂取活動を行なっている[59]。それは当然政重に報告されていたものと思われる。つまり政重を中心とした彼の家臣や長崎奉行、通詞等と連絡をもち絶えず海外の動勢を察知するための活動をしていたことが判る。

以上述べた外に、政重は宗門奉行として切支丹穿鑿に精勤している。寛永二十年政重が筑前で捕縛された潜入宣教師を穿鑿した時、その中に天文学に詳しい者がおり、彼に天文書を差出した。彼はそれを沢野忠庵に命じて翻訳させた[50]。これが後に向井元升の手を経て完成した「乾坤弁説」である。又、政重が転宗した伴天連、同宿等を切支丹屋敷に置き、給与を与えて切支丹教義や海外の動勢を察するための重宝な助手としていることは、「契利斯督記」によって窺うことができる。彼にとって信者の転宗、不転宗に拘らず、穿鑿自体が知識摂取の好機会であり、更に、家康の命で度々呂宋の国情探索のために渡航した西類子や[61]、秀忠の命で西洋に渡り切支丹教義や穿鑿法を調査した揖斐半右衛門等の報告[62]もその好材料であったと思われる。更に、政重が長年マニラに居住したいた日本人を情報顧問[63]としてていたことは重視すべきであろう。

尚、特殊ではあるが、政重はブレスケンス号事件の訊問の席上、船長スハープ等から海戦の方法、海外各地の情報、地理等の知識を聴取しているなど[64]、政重の海外知識摂取に対する熱意と積極性を窺うことができる。

以上政重の海外知識の摂取方法について延べたが、その内容は極めて多岐に亙っていたことが窺われる。

そこで、このような方法で摂取された知識は何如なる面で活用されたか、又その認識は何如なるものであったかについて次に述べてみたい。

## 三　海外知識について

先づ、東南アジア方面に関する政重の海外情報についてみると、

一六四一年八月十四日以来[65]蘭人の長崎移転事務のため長崎に逗留中の政重は、十月二十四日有馬領主高力忠房並びに長崎奉行等と共に平戸へ赴き、商館長ルメールに蘭人のキールン攻撃に関し

Hosei University Repository



地図を示すことを求め、その理由、西人の城砦の様子など中にはルメールの知らぬことまで詳細に訊由し、その結果政重は日本の隣人としては西人より蘭人を好むという理由から、「今年失敗しても明年再び攻め、占領するまで継続せよ」と命じている。[66]翌年十一月九日長崎奉行からキールン占領の報告を受けた政重は返書を認め、その意図、西人の城砦の取扱い、蘭人の同地での貿易の利益、駐留の理由など長崎奉行を通じて尋ねている。それにつき商館長オーフェルトワーテルは、西人或は他国人の再占拠防止と貿易上の理由から同地に駐留する旨のみ返答している。[67]政重が台湾の情勢の変化に注目していたことが窺われる。

次に、一六四三年十二月三日在府中の商館長エルセラックは、ブレスケンス号事件に関する訊問を受けるため井上邸を訪ねた。この時牧野親成、馬場利重の出座を待つ間、政重がエルセラックと交わしたマニラの情勢は次に示す如くである。（大目付井上筑後守政重）大目付はマニラの地図二枚を示し、イスパニアの諸堡塁の位置と構造、港の入口、諸船碇泊の水深、主城の位置などを話した。また、城には大砲三百門の外に、モスケット銃と短銃三千挺があるが、火薬やスヘルプ弾は少ないと言い、同地にはイスパニア人、ポルトガル人及び混血児が女子と合せて三千人いるが、兵士或は戦闘力のある者は八百人を越えず、うち百五十名は士官である。彼等は概ね城内に居住しているが、城は高さ十二フートの厚い城壁で囲まれ、数個の大河が流れ込んで、食料その他必要品輸送の便があり、兵が多数でなければ攻囲し窮迫させることは困難である。同地にはまたイスパニア人の支配下に支那人七千人以上が居住している。若し弾薬の欠乏でもない限り、この国民も征服するには多くの努力を要するであろうと言い、また三、四年前オランダ船一艘が同地で水を得たことも知っているかと尋ねられたので、その時に同行した司令官マテイアス・クワストから聞いたと答え、この地図のように正確なものはこれまで得られなかったので写しをバタビアの総督に送る許可を願い、これでイスパニア人に勝つことができると思うと述べたところ、承諾された上、多年マニラに住んでいた者を一人宿に遣わす故、彼からその地方の事情を聴取するよう勧められた。[68]

このことにより、当時東南アジア方面で西人と勢力抗争を繰返す蘭人をして「この地図のように正確なものはこれまで得られなかった」と驚嘆させる程精密な地図を所有し、然も詳細な軍事施設、兵器の種類や所有量、地形住民の種類と加え三、四年前の事件など最新の情報にまで及んでおり、政重のマニラに対する認識と配慮は極めて正確細心に亘っていたと思われる。そして、それは同年に長年居住した日本人を情報顧問[69]として聴取していたことは重視する必要があろう。

以上述べた日本側から蘭人への情報提供やキールン占領の示唆は、一六四七年一月八日牧野親成が蘭船のマニラ攻撃の状況を商館長フェルステーヘンに尋ねたことや、[70]同年八月六日通詞達が同人に「日本皇帝のために蘭人と戦うか」と尋ね、「我らは日本人の友であるが、奉行から要求されるまで回答できぬ」と返答を得ていること、[71]又同年十二月二十五日政重自身蘭船のマニラ攻撃に

Hosei University Repository

関して情報を聴取していること。[72] 更に、鎖国前後を通じ継続的になされる切支丹潜入に対し、幕府では前述の政重等のマニラの情勢などに関する緻密な情報収集活動を背景にその根拠地破壊と制圧を目的とした呂宋遠征を企画したが、[73] 実現し得なかったことなど考慮すると、幕府は切支丹対策の一環として日本近隣の切支丹の拠点攻撃を蘭人に代行させようとした意図が窺われる。政重の海外情報はかくの如き面でも活用されていたと思われる。

又、一六四五年二月三日井上邸を訪れた商館長オーフェルトワーテルは、政重には病中で会見できなかったが、家老岡島右馬丞に会い英船渡来の風説を報告した。それについて岡島は彼にこれを妨害する意志はないかと尋ねた処、上司がある故思うままにならぬという返答であった。[74] これについて同年三月四日政重は同人に英船渡来の際我が国官憲がこれを襲撃し乗組員を殺した場合の英人の復讐を想定して質問し、

兵力が弱少ゆえ心配することはない。インド全土に居るイギリス人は貿易や巡航のための八、九隻か、多くても十隻の船と乗組員の外には各貿易地に配置し、そこに居なければならぬ百人に過ぎぬ。

と返答を得、次いで英蘭連合による対日政策の危険性について尋ね、

ポルトガルの兵力は年々減少し、今はゴア、セイロン付近で我等と戦うのが手一杯であり、ヨーロッパでの戦争のためポルトガル国王はインド方面に援兵を出すことはできぬ、イギリスも戦争には兵力全く不足で、両者の連合も恐れることはない。[76]

井上筑後守政重の海外知識について（長谷川）



ということであった。政重は英国の極東における軍備状況、英蘭連合による軍備の拡大に伴う脅威から、欧州列強の対日軍事的侵略に対しても危惧の念を抱いていたことが窺われる。更に続けられた会話を記すと、

大目付（井上政重）は更に、我が総督がイギリスの対日貿易計画を聞けばイギリス船を捕え、その計画を止めさせるため数隻の船を派遣することはないかと問うたので、ないと答えた処、若しそれを行なえば日本皇帝は非常に喜ばれるであろうと言った。閣下（井上政重）はまた、日本皇帝が蘭、英の戦うことを望む旨をカピタンから総督に通知すれば、彼はこれをなすであろうかと問うたので、否、総督は奉行と陛下（将軍）の関係の如く、上司と代官に過ぎず、理由もなくオランダの古い同盟者と戦うことは不可能であると答えた。大目付はこのことは陛下が望まれることであろうと言ったが、予は何も言わず唯頭を下げるだけにした。[76]

とある。幕府では前述の切支丹対策の一環として利用しようとしたことと同様に、英国の対日貿易計画阻止にも蘭人をしてその防波堤の役割を果さんとする意図があったと思われると共に、そこには政重の献策があったのではあるまいか。更に、話題が欧州の国際関係や蘭国の政治体制に及んでいることは注目すべきであろう。

同月五日政重はインドの地図を携えた家臣を蘭人の宿に遣わして商館長オーフェルトワーテルに尋ねたことは、バタビアについては領域、耕作者、人口、又、ジャバの統治者、敵味方の状況、マタラムがバタビア攻囲の時の兵力、その回数、以前の支配者の

Hosei University Repository



ことや、更に、セイロン、マラッカ、モロッカ諸島に関する同様の内容、ボルネオ、セレベス、バリとの通商の有無等であり、それは詳細に書留められた。[77]このように政重は地図を利用して単に東南アジア諸地域の政治的変動だけでなく通商関係についても注意をはらっていたことが窺われる。

以上述べたことを要約すると、東南アジア方面に関する政重の知識は、欧州列強の出先機関とそれと連絡ある切支丹の動勢から対日軍事的、思想的侵略防止、或は幕府の海外出征計画の背景となるべき点に重点が置かれていたと思われる。

一六四三年一月九日通詞から蘭葡十年休戦条約に関し、幕府の嫌疑を受けたこと知らされた蘭人は、[78]通詞の進言により、[79]早速同月十五日政重に対し、葡国は王の死後西国に併合されたが重税に苦しんで独立戦争を起し、蘭仏両国に援助を求めたので、蘭国は葡国との連合による西国の戦力低下を謀るため条約を締結した旨説明した。[80]これに関し政重は老中に報告したが、その結果一応オーフェルトワーテルはバタビアからでなく、台湾から赴任した事を理由に明年度の報告を待つことになった。[81]しかし、同年七月二十一日再度赴任した商館長エルセラックは、ブ号事件のため参府期日が繰上げられ十二月一日江戸に到着し、同月十四日牧野親成から蘭葡十年休戦条約について説明を求められ、前述のオーフェルトワーテルの報告以上に詳述し、次いで尋ねられた蘭葡再開戦の事情については、葡国王の蘭援軍虐殺、印度での葡人の背信行為によるものである旨返答した。[82]後者は十一月中に政重が入手したと思われる[83]情報々告によるものであろう。以上蘭葡十年休戦条約に関する一件は、新旧両商館長の説明が同様の主旨であること、蘭葡再開戦の実情の明確化により、幕府では蘭人に切支丹渡来と両葡両国人の陰謀報告即ち和蘭風説書提出の義務を再確認させることで解決をみたようであるが、[84]かくの如き解決をみたのは、幕府当局が政重の情報を根底にエルセラックに訊問した結果によるものであろう。

一六四五年二月六日政重が蘭小艇に関しオーフェルトワーテルに質問した時、オーフェルトワーテルは蘭公爵ウイルレムと英王女メリーの結婚による英蘭関係が、英葡の同盟成立と関連してさらに蘭葡の同盟にまで発展するのではないかという懸念に対し、公爵は他国の王と異り、権限に制限があり、我が国七州の内、各州は最も優れた貴族に治められ、また各州で選ばれた少数の人が集って最高権力を有するものとなる。公爵は貴族中最も勢力があり、尊敬されて国の頭に選ばれたのであるが、戦争、他国との条約等の主要件は少数の選出貴族が処理する故、このような新しい親族関係が日本に関係を及ぼす心配はないと述べ、ドイツ、イギリス、ポーランド、ベニス等の例を述べて特別のものでない。

と報告した。[85]話題が蘭国の政体にまで及んでいることは注目しなければならない。

一六四七年一月六日政重は蘭葡国交の状態、蘭葡国以外で西国と抗戦状態にある国等について質問し、欧州では平和であるが、ブラジルでは再び戦闘状態に突入した事実や、蘭葡両国間では交通が自由に行われていること。更に、仏瑞両国が英国の同盟国の

Hosei University Repository

独国と抗戦中であることなどの返答を得た。[86] 次いで同月二十日政重は同人に欧州諸国君主間の婚姻関係に関する記録提出を求め、[87] 同月二十二日各国の接近している図と共に、

英国王の長女（メーリー）と、オランダのプリンスの長男（ウイルレム）と。英国王（チャールス一世）と仏国王（ルイ十三世）と西国王（フェリペ四世）の姉妹（アンリエット・マリー）と。西国王（フェリペ四世）と、仏国王（ルイ十三世）の姉妹（イサベル）と。

と記された記録を受取った。[88] 政重は前述の如く英蘭連合による対日政策を仮定して危惧の念を抱いていたと思われるように、欧州列強の国際関係を察知し、それが各国の東南アジア出先機関に影響を及ぼすことにより引き起される何らかの対日政策を懸念していたのであろう。それにしても政重の情報が蘭人の活動範囲を通してブラジルのことまで知り得たようである。尚、ブラジルのことに関し、後年政重が蘭人と酒食を共にした時、以前同地に人食い人種の居ることや蘭葡両国が同地方と交通を開き、城砦を有することを聞いたと述べていること[89]から、政重の海外知識摂取は幕府の対外政策に根底を置きながらも、自らの知的好奇心も相俟って、その範囲を拡大していたものと思われる。

以上政重の海外知識について述べたが、その摂取に使用された地図に関して付言する必要があろう。一六四三年十二月三日政重とエルラックがマニラの情勢を話した時に地図が利用されていたことや、一六四五年二月五日政重がインド地図を携えた家臣を蘭人の宿舎に遣わして情報を聴取したことは既述の通りであるが、同月三日政重の家老岡島が英蘭王室の関係、印度地方での英蘭の衝突事件に関して聴取した時も、屏風に貼付した印度地図と世界地図を利用している。[90] 又、一六四七年十二月二十日蘭人が政重の家臣に天文、幾何学の教授を行った時、「十七州の地図にオランダに属する土地の境界」を書き加えている。[91] 以上述べた如く、政重等の情報収集活動には、地図が利用される場合もあったようであるが、井上邸所蔵の地図には蘭人のもたらす最新の世界地理情報が蘭人自身の手で書加えられており、その地図によって最新の世界情勢が察知できるものであったことが窺われる。更に、一六四五年二月一日政重の使が蘭人に、「バタビアから長崎まで及びゴアからマカオまでの航海は何日であるか。また、マラッカ海峡以外に航路があるか。」等について尋ね、スンダ、バリ両海峡を示され、[92] 三通路の状況に関する返答を得ていることを考慮すると、前記の地図が実用的な航海図としても利用されたのではないかと思われる。それと共に、政重等が蘭人の世界各地における活動と、それと伴う世界各地の情勢を理解すべく努力していたことが窺われる。

そして、それらは鎖国前の屏風圧立という特徴[93]をそのまま踏襲したものであり、その内の一枚は家臣が携帯し得たことから一枚刷りの図を折りたたんで表紙を付けた折図[94]であったと思われる。そして、その数は「マニラの地図」二枚、屏風貼付の「世界・印度図」で二枚、折図の「印度図」一枚と、前述の蘭人が提出した欧州の婚姻関係を記録した各国の接近している図を一応地図と考えれば、最低六枚の地図が所蔵されていたことが窺われる。

Hosei University Repository



世界地理の研究は、鎖国前はかなりの識者間に普及し、寛永十四年八月には家光自ら使臣を長崎に派遣して世界図を模写させたこともあった程であるが、鎖国の断行に伴い大方その進歩を止められていた。[95] しかし、欧州列強の対日政策や切支丹の日本潜入等万一の危険に対処する必要から、或は幕府の海外遠征計画に基づく海外情報の必要から、鎖国後も極一部にあっては最新の世界地理研究が進められていたと思われる。尚、西欧の語学に通じない儒者等の間にも禁書中から探し求め密かに研究は進められていたようであるが、[96] 政重等の如く公的立場の研究の比ではなかったと思われる。

## 四　おわりに

寛永十七年六月宗門奉行に任ぜられた政重は、幕府が最も嫌悪する切支丹禁圧の急先鋒として単に国内の切支丹信徒撲滅に心血を注ぐだけでなく、切支丹教師の日本潜入防止、切支丹国の軍事的侵略、蘭国と切支丹の連合による万一の危険に対処するため、或は幕府の海外遠征計画の背景となる敵状認識[97]などのため、自邸に所蔵されている地図を利用して、葡、西、英、蘭等各国々の東南アジア出先機関の動勢やその方面の地理、蘭国の活動範囲を中心とした当時の欧州や南米の国際関係などを重点的に、そのほか色々な分野の海外知識を緻密に摂取している。

従って、その内容と、その摂取方法の中でも長崎奉行や通詞等との連絡、政重や彼の家臣の活動を考え合せるとき、それは一個の組織体の様相を呈していると考えられる。つまり、政重や彼の家臣は幕政の中枢を掌る老中の耳目となるべき江戸における海外情報収集機関としての性格を有し政重はその中心人物であったと思われる。

鎖国により海外との交渉を閉ざされ、幕府内部にあって対外政策は秘密裡に行われていたため、海外事情を知る和蘭、唐両風説書の利用、蘭人の江戸参府を機会にそれを聴取し得たのは幕府要人が主体に過ぎない時代にあって、政重をして当時の海外通の第一人者と称しても過言ではあるまい。

附記、政重の海外知識は、本論で述べた海外情報、世界地理以外に、兵学、医学、生物学、化学等に亘っているが、何れ他に機会を得て発表したい。

**註**

(1) 幸田成友『日欧通交史』同『日本大王国志』(東洋文庫版)参照

(2) 姉崎正治『切支丹宗門の迫害と潜伏』、『切支丹伝道の興廃』等参照

(3) 遠藤周作・三浦朱門『キリシタン時代の知識人』所収「井上筑後守――弾圧者という名の転びキリシタン――」(日経新書)に生涯に亘って考察されている。

(4) 『寛政重修諸家譜』二　二四一頁

(5) 『右同』六　二五三頁、松平清康、広忠、家康三代に仕えた阿部大蔵少輔定吉の妾が懐妊の後、清宗に嫁して清秀を産んだことをいう。従って、清秀は阿部氏の直系であり、政重はその孫にあたる。『改訂大武鑑』巻五には「安部政

Hosei University Repository

重とある。

（6）註（4）と同じ

（7）『武徳編年集成』巻五五、慶長十三年是年の条、東大史料編纂所々蔵

（8）註（4）に同じ

（9）『正藩翰譜』上、三六八頁

（10）北島正元『江戸幕府の権力構造』四五六頁

（11）註（4）に同じ

（12）（13）（14）『寛政重修諸家譜』二　二五三頁

（15）『徳川実紀』第二編　元和九年八月六日　三〇一頁

（16）右同　元和九年十一月十九日条　三一〇頁

（17）右同　元和九年是条　三一二頁

（18）右同　寛永二年是年条　三五五頁

（19）註（5）に同じ

（20）『寛政重修諸家譜』二　二四一頁

研究』二四二頁

（21）（22）註（5）に同じ

（23）『古事類苑』官位部三　三〇九頁

（24）『譜牒余録』巻四六、内閣文庫所蔵

曽祖父井上筑後守儀、寛永十五寅年正月二日御前江被ニ召出一、肥前有馬江為ニ上使一可レ被レ遣之旨、御直被ニ仰出一也、（中略）彼地江相越松平伊豆守、戸田左門委細可ニ相談一之由、御詞被ニ仰含一以レ御ニ懇上意一御腰物青江御手自頂戴也（下略）

井上筑後守政重の海外知識について（長谷川）

松平信綱、戸田左門の相談相手として、島原乱鎮圧に赴く政重に対する将軍家光の懇願の様子が窺われる。

（25）東京大学附属綜合図書館所蔵

（上略）一揆取込候城海手山手相廻り見分仕候、要害能御座候間、早速責ニは人数多様可レ申躰ニ候、依レ之左門殿、伊豆殿築山高クつき、大筒石火矢ニて打たて、責道具丈夫ニ相調、仕寄をも近候といいきせ（力脱カ）、其上見計可ニ申付一候申候（下略）

正月十八日

阿部備中守様

稲垣摂津守様

久貝因幡守様

曽我又左衛門様

井上筑後守

（26）『通航一覧』第五　一九七頁

（27）『続々群書類従』宗教部二「契利斯督記」六四七―八頁

（28）藤野保『前掲書』二三九頁

（29）『通航一覧』第五　一八六頁

（30）『徳川実紀』第三編　三一四―五頁

（31）『続々群書類従』宗教部、二、同上書六四八―九　六五二―五頁等、岡本三右衛門、二官、南甫、寿庵等がいる。

（32）『長崎雑記』九州大学九州文化史研究所々蔵

（33）村上直次郎『抄訳バタビア城日誌』中、九六―一〇一頁、及び幸田成友『日本大王国志』二二―五頁（東洋文庫版）

Hosei University Repository



(34) 村上直次郎『長崎オランダ商館の日記』第一輯、八一―一二〇頁

(35) 村上直次郎『前掲書』第二輯、一七五―一八三頁、及び同『長崎市史』通交貿易編・西洋諸国部　四八五―五〇二頁

(36) 『長崎雑記』及び村上直次郎『長崎オランダ商館の日記』第二輯　一九八―二二三頁

(37) 『通航一覧』第四、一五〇頁では「長崎覚書」を引用し、寛永十六年を除く四回とするが、卒業論文でまとめた数は五回である。これについてはなお今後史料の発見に努め糺明したい。

(38) 村上直次郎『前掲書』第一輯　三〇三―四頁、一六四三年十二月二十三日条、政重がエルセラックから蘭船の旗識、蘭船と西葡船の識別法を聴取し、長崎及び他港湾の入津手続について指図していることや、同『前掲書』第三輯　二六六頁、一六五四年二月一日条に、政重は蘭人に対し、老中間の支那生糸のパンガド廃止論争に関して通詞等に意向を打診した際の内容を話していることなどからも窺い得るのではないか。

(39) 『寛政重修諸家譜』二　二四一頁、『正藩翰譜』上、三七〇頁

(40) 板沢武雄『阿蘭陀風説書の研究』所収「阿蘭陀風説書解題」、浦廉一『華夷変態』上冊所収「華夷変態解題―唐船風説書の研究――」参照

(41) 『徳川実紀』第三編　二二二頁及び村上直次郎『前掲書』第一輯　附録三八頁

(42) 『寛明日記』巻三三、東京大学史料編纂所所蔵

(43) 村上直次郎『前掲書』第三輯　三九―四〇頁

(44) 右同　一〇三頁

(45) 註(43)に同じ

(46) 『長崎県史』第四　七九九頁

(47) オスカー・ナホッド『十七世紀日蘭交渉史』二〇二、二三二頁

(48) 村上直次郎『前掲書』第一輯　三一五頁

(49) 村上直次郎『前掲書』第二輯　七七頁

(50) 『華夷変態』上冊　一六頁

(51) 村上直次郎『前掲書』第一輯　一四三頁

(52) 村上直次郎『前掲書』第三輯　二〇一頁

(53) 板沢武雄『蘭学の発達』八五頁、斎藤阿具「蘭人の江戸拝礼」史学雑誌二一―九

(54) 斎藤阿具「前掲論文」

(55) 村上直次郎『前掲書』第二輯　二七七―八頁

(56) 右同　二〇一―二頁

(57) 右同　二六〇頁

(58) 右同　一八六　一九一頁等

(59) 村上直次郎『前掲書』第一輯　三六九―三七一頁

(60) 明治前日本科学史刊行会『明治前日本科学史総説・年表』四六頁

(61) 中村孝也『徳川家康文書の研究』下巻之一五一四―六頁

Hosei University Repository

(62) 『通航一覧』第五　一九六頁
(63) 岩生成一「松倉重政の呂宋遠征計画」史学雑誌四五―九
(64) 和田万吉『モンタヌス日本誌』三三五―三八五頁
(65) 村上直次郎『前掲書』第一輯　八一頁
(66) 右同　一一七頁
(67) 右同　二〇一―二頁
(68) 右同　二六九―二七一頁
(69) 註(63)に同じ
(70) 村上直次郎『前掲書』第二輯　一四〇―一頁
(71) 右同　一六九頁
(72) 右同　一八九頁
(73) 岩生成一「前掲論文」
(74) 村上直次郎『前掲書』第二輯　三一―二頁
(75)(76) 右同　三二―三頁
(77) 右同　三四頁
(78)(79)(80) 村上直次郎『前掲書』第一輯　二〇八頁
(81) 右同　二一〇頁
(82) 右同　二九一―二頁
(83) 註(57)に同じ
(84) 村上直次郎『前掲書』第一輯　二九六―七頁、尚、和蘭風説書の義務付けられたのは、片桐一男「蘭船の長崎入港と阿蘭陀風書」(「長崎市立博物館報」第七号所収)京口元吉「甲必丹と和蘭風説書」(「史観」第二十五冊)によれば、一六四一年十一月八日とある。

井上筑後守政重の海外知識について（長谷川）

(85) 村上直次郎『前掲書』第二輯　三四―五頁
(86) 右同　一三五頁
(87)(88) 右同　一五〇頁
(89) 村上直次郎『前掲書』第三輯　二八二頁
(90) 註(72)に同じ
(91) 村上直次郎『前掲書』第二輯　一八六頁
(92) 右同　三〇―一頁
(93) 開国百年記念文化事業会『鎖国時代日本人の海外知識』一九六頁
(94) 右同、二〇四頁
(95)(96) 右同一九五―六頁
(97) 岩生成一「前掲論文」

〔追記〕　成稿にあたり、種々の御指導御助言を賜った田中健夫先生、片桐一男先生、並びに史料の便宜をはかって頂いた東京大学史料編纂所、東京大学附属綜合図書館、内閣文庫の皆様、そして、全てに亙り御指導を賜った指導教授岩生成一先生に深甚なる謝意を表したい。

また、執筆中、種々便宜をはかって頂いた、勤務校の飛田良一校長先生ほか諸先生方に厚く御礼を申し上げる。